早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
3051-2

W
学位論文
3051
2

博士（人間科学）学位論文 概要書

宗族マウルの基層構造に関する研究

―忠南地方一同族村の門中とマウル―

２００１年１月

早稲田大学大学院人間科学研究科

林　在　圭

指導教授　嵯峨座晴夫

概要

本研究の目的は、まず現代の韓国社会における宗族マウルの基層構造、すなわち「家族構造・親族構造・祭祀構造・経済構造を明らかにした上で、さらに韓国の宗族マウルにおける社会的関係（人間関係構造）を析出し、その行動原理の理論的構築を試みる。したがって本研究では、戦後の宗族マウルのあり方（様態）に焦点を当てることをとおして、宗族マウルの生活構造に関する総合的モノグラフを作成するという性格をもっている。

本研究で宗族マウルを取り上げる意義は、①宗族マウルは韓国農村社会の根幹の一形態をなすと考えられ、②社会変動にもかかわらず宗族集団や宗族マウルは、現在もなお現存している。しかし、③韓国社会の変動とともに近年宗族組織が社会文化的・政治的・あるいは理念的機能から再編成される傾向がみられる。ところで、④宗族組織は依然として韓国社会または文化の基礎構造・エートスをなすものであり、⑤こうした宗族組織の本拠地となる宗族マウルは儒教的文化伝統を色濃く有し、韓国人の価値観の形成や変容過程を知るうえで重要であると考えられる。さらに⑥従来の研究視点に対する反省、つまり日本帝国主義による植民地統治の手段としてのとらえ方、近代化論を背景とする克服すべき対象としての否定的なとらえ方、さらに変化をも考慮せず「両班」と常民との対立構造（班常関係）の固定的とらえ方など、にある。とくに、本研究の対象とする宗族マウルは、上述した③の再編事例として、韓国における宗族マウルの未来像を展望するうえで、格好の事例であると考えられる。

本論では、忠清南道の伝統的な両班・宗族マウルを事例として、これまで、宗族マウルの研究ではややもすると等閑視されてきた生産関係を主軸として論を展開する。

ところで、韓国の村落社会、とりわけ宗族マウルに関する従来の研究は、主として「親族研究」に向けられてきた。そこでは、親族組織としての門中（ムンジュン）がマウル（村）を超越する形で存在し、門中の原理が村を支配するところに、宗族マウルの特徴が見いだされてきた（たとえば、李萬甲 1960『韓国農村の社会構造』、崔在錫 1966『韓国家族研究』、金宅圭 1979『氏族部落の構造研究』、李光奎 1997『韓国文化の構造人類学』）。この特徴は、とくに上下（上典（サンジョン）・下人（ハイン））関係・地主小作関係・班常（両班（ヤンバン）・常民（サンミン））関係として提起されてきたといえる。従来の宗族マウルに関する研究ではまた、親族集団が果たしている社会的役割の重要性、とりわけそれが村落の社会的中核をなすものであるが故に、家族や親族の研究に集中してきたといえる（たとえば、金斗憲 1969(1947)『韓国家族制度研究（改訂版）』、崔在錫 1975『韓国農村社会研究』、嶺南大学校人文科学研究所編 1990『良佐洞研究』、李光奎 1990「韓国の家族と宗族』）。こうした傾向があまりにも強力であったがために、生業関係に関する研究は無視されてきた感があるのは否めない。

他方、村落社会を理解するために、もっとも重要なのは家族（親族を含む）であり、一方では、それに等しく重要なのが農業であることは、多くの研究者が指摘してきた。農業は農村社会の性格を特徴づける重要なもうひとつの要素であることは間違いない。とはいえ、従来の研究では、過去の班常制度のような身分関係による土地所有の違いや、地主小作関係といった農民の社会経済的地位と階層の構成など、とくに社会葛藤（対立）・社会移動や社会的変化との関連のなかで扱われてきた（たとえば、崔在錫 1988『韓国農村社

会変動研究』)。

しかし、農業経営は人間のもっとも基本的な生産活動であり、また農業経営は人間にとって単なる財貨の獲得のための生産や消費という経済的な側面だけに意味を有するわけではない。宗族マウルであれ、非宗族マウルにおいても、農村の社会的関係は農業経営を中心に形成・発展してきたと考えられる。農業経営の変化は、農村社会の経済的構造（生産および分配・消費など）の変化のみならず、家族関係や地主小作関係・共同労働関係などといった社会的・文化的側面の変化をも生起させる。また、農業経営の変化は土地の所有形態・社会関係（対人関係）にも変化をもたらす大きな要因となっている。こうした観点から本稿では、宗族マウルにおける生業、とりわけ農業に関する詳細な分析とその究明を、もう一つのねらいとする。